



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「話す」タスクと「書く」タスクにおける産出語彙のレベルの比較分析：習熟度の差を中心に(fulltext)
Author(s)	小西,円
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 72: 481-492
Issue Date	2021-02-26
URL	http://hdl.handle.net/2309/166844
Publisher	東京学芸大学教育実践研究推進本部
Rights	

「話す」タスクと「書く」タスクにおける産出語彙のレベルの比較分析

—— 習熟度の差を中心に ——

小 西 円*

留学生センター

(2020年9月29日受理)

1. はじめに

熟達した言語話者は、言語産出を行う際に、特定のジャンルに応じた言語を産出することができる。そのため、読み手はある発話や作文の一部を見ただけで、それらがどのようなジャンルの一部であるかをある程度想像することができる（ハリデー・ハッサン 1991: 163）。

本研究の一番の関心事は、第二言語習得の過程において、学習者がどのようにしてそれらの型を学習していくのか、という点にある。そのための一つの手がかりとして、「2つの項目からどちらがよいか選ぶ」という同類のテーマで行われた「話す」タスクと「書く」タスクを、学習者の習熟度ごとに比較し、媒体の違いが産出する語彙に与える影響について考える。また、「書く」タスクは、学習者が自身の母語で作文を書く時と同様に書いてよいという条件が与えられており、辞書等の使用が認められている。辞書の使用は、当然学習者の使用できる語彙の範囲を広げる。そこで、辞書の使用が許可された「書く」タスクと、即時的な産出が求められる「話す」タスクにおいて、学習者が使用する語彙の数やレベルが、学習者の習熟度レベルとどのように関係しているかを分析する。

2. 先行研究

第二言語習得研究において、異なる作業課題による言語産出の違いについては、様々な角度から研究が進められている。

日本語に限った研究を見ても、「話す」「書く」とい

う媒体による違い、産出する談話やテキストのタイプによる違い、タスク条件の違いなどを分析した研究が見られる。

「話す」タスクと「書く」タスクの違いを見る研究に、奥野・ディアンニ（2015）や迫田（2019）、村田（2019）がある。どれも、同一被験者が同一テーマを異なる作業課題（「話す」と「書く」）で産出したときの言語使用を比較するもので、多言語母語の日本語学習者縦断コーパス（以下、I-JAS）のストーリーテリング（以下、ST）とストーリーライティング（以下、SW）をタスクの素材としている。STタスクにもSWタスクにも、辞書使用は認められていない。

奥野・ディアンニ（2015）は、「書く」タスクでは「話す」課題より複雑な形式を用いるケースが多いものの、複雑な形式であるがゆえに正確さが落ちる場合があることや、正確さを高めるためにより単純な形式を用いる場合があることを明らかにした。その要因として、学習者の言語知識、自らの運用を客観視するメタ言語的知識、運用に至る構成的処理過程を支える心理言語学的知識という各知識レベルが関与している可能性を指摘している。また、迫田（2019）は、「話す」タスクと「書く」タスクの違いが「受け身」「～てしまう」「有対自他動詞」「助詞」の言語使用に与えた影響を分析したものである。「受け身」と「～てしまう」の複雑さはプランニングタイムの有無に影響を受けるが、「有対自他動詞」と「助詞」は「話す」タスクの誤用が「書く」タスクでも残る場合が多いことを明らかにし、「正確さ」については指標を何にするかによって結果が異なることを指摘した。村田（2019）は、学習者の習熟度が産出する言語形式に与える影響

* 東京学芸大学 留学生センター（184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1）

を俯瞰的に見るために、テキストマイニングの手法を使ってSTタスクとSWタスクを分析している。その結果、延べ語数では、フィラーなどの話し言葉のみ出てくる語彙を除いても話し言葉のほうが書き言葉より多いことが明らかになった。これは、プランニングタイムの有無が要因となって、話し言葉が断片的、書き言葉が統合的であるという特徴が表れた結果であると述べている。異なり語数に関しては、話し言葉では、初級を除き、習熟度が上がるにつれて語を多様に用いているとは言えないこと、書き言葉では、習熟度が上がるにつれて語を多様に用いることができていることが示された。

次に、同じ媒体を用いて異なるタイプの談話やテキストを産出し、その違いを分析する研究を概観する。小西(2017)では、I-JASを用いて、中級レベルの学習者の「話す」タスクであるSTタスクとロールプレイ(以下、RP)タスクを素材とし、産出語彙の相違を分析している。その結果、母語話者は、独話であるSTタスクと、対話であるRPタスクで独話と対話に適した言語産出を行うのに対して、中級レベルの学習者の言語産出にはそのようなジャンルの違いが表れないことがわかった。中級レベルでは、独話と対話といった異なるジャンルに対応した言語産出の調整が難しいことが示唆されている。また、西(2011)は、「書く」タスクに3つの異なる条件を設定し、流暢さ、複雑さ、正確さの比較を行ったものである。西(2011)の調査に参加したのは上級レベルの日本語学習者で、「意見文」と「記述説明文」という2種の作文をそれぞれ20分で書くタスクを行った。タスク条件として、作文課題の指示文だけを与える統制群、指示文と小冊子形式の語彙辞書を与える語彙辞書群、指示文とモデル文を与えるモデル文群を設定し、比較を行っている。その結果、語彙辞書群は、流暢さの指標となる異なり語数においてモデル文群より有意に効果が低く、その他の項目については有意差がなかった。辞書使用が有効に働かなかった原因として、ほとんどの調査協力者が辞書を手に取りはしたものの、アンケートに「語彙辞書の検索は行わなかった」と回答していることから、時間制限下での作文では辞書使用が有効に働かない可能性を指摘している。また、テキストタイプに関しては、記述意見文のほうが流暢さと正確さが高い一方で、意見文のほうが複雑さが高いという効果が示された。西(2011)はこの結果を、意見文のほうがより内部構造の複雑な文を書き手に要求していると分析している。また、「規則にもとづいたシステム」に属する複雑さと正確さに同時に注意を払うことができ

ず、trade-off効果が表れると述べている。

西(2011)の調査では、時間制限下の作文では冊子形式の辞書使用が作文の流暢さ、複雑さ、正確さを高めることに貢献していないという結果が出たが、高校生の日本人英語学習者を対象とした山西(2005)では、分析観点は異なるものの、英作文における辞書使用の有効な側面が明らかになっている。山西(2005)の調査は、自由英作文において「Basic」「Intermediate」「Advanced」の3レベルの生徒の辞書使用を分析したものである。辞書使用が英作文の問題解決に成功したかどうかを分析した結果、「Advanced」レベルでは成功が90%、「Basic」レベルでは成功が74%であるのに対し、「Intermediate」レベルでは成功が65%と、最も成功率が低かった。これらの理由として、「Advanced」レベルの生徒は複数の表現の候補を持ちながら作文を書いているため辞書を使うことで候補を吟味しながら作文を作成する傾向があり、その結果辞書使用が問題解決の成功につながることで、「Basic」レベルでは逐語的に辞書を使用しており、対応語が見つかった時点で問題解決に成功することなどを指摘している。一方で、「Intermediate」レベルでは文法などのマクロな事柄を辞書で調べる傾向があり、それらが辞書に書かれていない、または、見つけることができずに失敗することが多いと指摘している。

このように、第二言語学習者の言語産出は、媒体、産出する談話やテキストのタイプ、タスク条件など、さまざまな要因によって異なりを見せる。

ここから、「書く」タスクにおける辞書の使用について考えたい。第二言語学習者が作文を書く際に、辞書の使用は欠かせないものである。鈴木(2012)は、留学生の辞書使用の実態を調査したものであるが、「作文やスピーチ原稿の時に辞書を使うか」という質問に「非常によく使う」「よく使う」と答えた留学生は91%に上った。また、「研究計画や論文を日本語で書く時に辞書を使うか」という質問に対しても、「非常によく使う」「よく使う」と答えた留学生は71%に上った。つまり、日常的な「書く」作業において、他者に提出するようなものは、辞書を使用して書くことが一般的である。しかし、「話す」作業については、あらかじめ予定されていたスピーチなど以外、辞書等を使用して話すことはできない。

そこで、本研究では、「話す」タスクと、辞書を使用した「書く」タスクを比較することで、学習者の日常的な言語産出の能力を見ることができると考える。

3. 目的

本研究の目的は、同類のテーマで行われた「話す」タスクと「書く」タスクに関して、学習者の習熟度レベルが言語産出にどのように影響しているかを分析することである。ある習熟度の学習者の言語的パフォーマンスの目安を知ることは、学習者が目標言語の型をどのように獲得していくのかを知るための1つの手がかりになる。

本研究における研究課題は、以下のとおりである。具体的には、上級と中級前半の学習者2群を比較する。

- 研究課題1:「話す」タスクと「書く」タスクは、産出語彙の語彙レベルがどのように異なるか
研究課題2:習熟度が異なる学習者は、産出語彙の語彙レベルがどのように異なるか

4. 調査の方法

4. 1 調査データ

調査には「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)」のデータを用いる。「話す」タスクとして、母語話者である調査者と調査協力者である日本語学習者の「対話」タスクを用いる。また、「書く」タスクとして、「エッセイ」タスクを用いる。

「対話」は、半構造化インタビューの形をとっており、調査者が日本語学習者に行う質問があらかじめ決められた状態で、約30分の対話を行うものである。本研究では、約30分の対話の最終段階に行われる「議論」と呼ばれる2つの質問を対象とする。「議論」のテーマは「都会に住むか田舎に住むか」と「お金と時間とどちらが大事か」である。調査協力者は調査者からの質問を受けて、「都会か田舎」「お金か時間」の選択を行い、その理由を話すように促される。2つの質問は連続して行われる。

「エッセイ」は、I-JASのデータ収集に参加した調査協力者に対して、任意で参加者を募って収集したデータである(迫田2016, 迫田他2016)。新聞社の募集する「私たちの食生活」というテーマのエッセイに応募するという設定で、(1)に示すように文章の大まかな構造と文字数の規定が与えられている。しかし、時間制限はなく、母語でエッセイを書く時と同様に、辞書やインターネットを使ってもよいとされている。禁止されていることは、日本人に頼んで書いてもらうことと、友人にチェックしてもらうことである。タスクの

課題は、日本語版だけでなく、調査協力者の母語でも示されており、タスクの指示内容が理解できない、ということはない。

- (1) 調査協力者に示されたエッセイタスクの課題(日本語版)

日本の新聞社が「私たちの食生活」というタイトルで、エッセイを募集しています。最優秀作品には、賞金3万円が与えられます。

◆課題◆

私たちは日常生活で、ファースト・フードと家庭でゆっくり味わう手作りの料理を食べています。ファースト・フードと家庭料理を比較し、それぞれの良い点や悪い点などを説明して、「食生活」についての意見を600字程度で書いてください。

このように、「対話」も「エッセイ」も、「都会と田舎」「お金と時間」「ファーストフードと家庭料理」という2項を比較し、どちらが良いかを述べるという同種のテーマであるため、比較が可能であると判断した。「対話」では、該当する部分のみを調査対象データとする。

4. 2 調査対象者

本研究では中国語母語話者に絞って分析を行う。「対話」と「エッセイ」のどちらにも参加した調査協力者をSPOTの点数によって習熟度を分け、上級レベル14名、中級レベル14名の計28名を本研究の調査対象者とした。I-JASで使用しているSPOTは「SPOT90」(Simple Performance-Oriented Test, 小林2015)であり、すべての調査協力者が実施している。SPOTのレベル判定は、90～81点が上級、80～56点が中級とされている¹。上級レベルの調査協力者を選定する際には、90点から降順に配列し、上から14名を選んだ。中級レベルの学習者を選定する際は、上級とのレベル差がわかりやすくなるよう、下限の点数である56点から昇順に配列し、点数の低いものから順に14名を選んだ²。そのため、この学習者群の習熟度は中級前半とする。

調査対象者は表1の通りである。上級の14名を上級群、中級前半の14名を中級前半群と呼ぶ。

表1 調査対象者

上級群		中級前半群	
調査ID	SPOT点	調査ID	SPOT点
CCH12	81	CCH21	57
CCH16	81	CCH29	59
CCH23	81	CCH26	60
CCH45	81	CCH30	62
CCH55	81	CCM14	63
CCM01	81	CCH25	64
CCH39	82	CCM07	65
CCM30	83	CCM42	65
CCM35	83	CCH49	67
CCM40	83	CCM18	67
CCM54	83	CCH36	68
CCM50	84	CCM17	68
CCH09	85	CCM28	68
CCM22	85	CCH54	69

4. 3 学習者の辞書使用

「エッセイ」タスクを行う際には、母語でエッセイを書く時と同様に、辞書やインターネットを使用してよいという条件が設定されていた。使用したものは、事後アンケートで答えることになっていた。

表2は、各調査協力者が事後アンケートに回答した内容である。「インターネット」を使用したと回答した者は、具体的には、Yahoo!、百度、Googleなどの検索サイトや、「沪江小D」などの日本語学習サイトであった。辞書として使用したり、母語の表現の一部を翻訳したりした可能性もある。また、表2の「使用あり」は、アンケートに「使用あり」とは回答したが、具体的に何を使用したかの回答がなかった者である。

表2 「エッセイ」における辞書等の使用状況

上級		中級前半	
調査ID	使用したもの	調査ID	使用したもの
CCH12	辞書, ネット	CCH21	辞書
CCH16	なし	CCH29	辞書, ネット
CCH23	辞書, ネット	CCH26	辞書, ネット
CCH45	辞書, ネット	CCH30	参考書, ネット
CCH55	辞書	CCM14	辞書
CCM01	辞書, ネット	CCH25	使用あり
CCH39	辞書, ネット	CCM07	辞書
CCM30	辞書, ネット	CCM42	辞書, ネット
CCM35	使用あり	CCH49	辞書
CCM40	辞書, ネット	CCM18	辞書, ネット
CCM54	辞書	CCH36	辞書
CCM50	ネット	CCM17	辞書
CCH09	辞書	CCM28	辞書, ネット
CCM22	辞書, ネット	CCH54	辞書, 参考書

表2から、上級のCCH16以外のすべての調査協力者が何らかの参考資料を見てエッセイを書いていることがわかる。これは、母語で何かを書く場合にも、わからないことがあったら辞書等を調べて書くという行

為と同じとも考えられるが、学習者が目標言語で書く場合には、語を調べることにとどまらず、表現を翻訳するという行為に広がる。そのため、「エッセイ」タスクで使用する語彙は、日本語学習者が「話す」タスクで使用可能な語彙の範囲より広がるといえる。また、辞書を使用しない「書く」タスクよりも、本研究で扱う「エッセイ」タスクのほうが、使用語彙の範囲が広がると考えられる。本研究では、そのような点もふまえて、産出語彙のレベルを分析対象とする。

4. 4 データの整形

まず、「対話」のデータ整形について手順を述べる。「対話」から2つの「議論」を行っている場面を特定し、抜き出した。そこから調査協力者の発話のみを取り出し、調査者のあいづちや「笑」などの言語行動の注記を取り除いてから、形態素解析を行った。形態素解析の精度を上げるため、本研究では調査対象としないフィルターや語断片を取り除き、「自分で勉強一するしかないです」(CCM54)のような発話における長音記号(ー)も取り除いた。また、解析精度向上のため、「もっともっと勉強したいお金はいい」(CCM54)のように2文が繋がった発話には、「もっともっと勉強したい、お金はいい」のように、文末や節末と思われる個所に「、」や「。」を入れることとした。

次に、「エッセイ」のデータ整形について手順を述べる。エッセイは、タイトルや伏字になっている調査協力者氏名がある場合はそれを除外し、本文のみを取り出した。その本文に対して形態素解析を行った。

形態素解析は、日本語文章難易度判定システム(jReadability)³を用いた。jReadabilityは本来文章の難易度を判定するシステムであるが、詳細な語彙情報も同時に出力できる。形態素解析は形態素解析エンジンにMeCab、形態素解析辞書にUniDicを使用しており、各語に日本語教育のレベル判定が付与される。このレベル判定は「汎用的日本語学習辞書開発データベース」⁴によっており、レベル判定は「初級前半」「初級後半」「中級前半」「中級後半」「上級前半」「上級後半」の6段階となっている。助詞などの機能語や、カタカナ語の「フード」など「汎用的日本語学習辞書開発データベース」に上がっていない語はレベル判定が付与されない。

本研究では、jReadabilityによって出力された語彙情報を用いる。

5. 調査結果

5. 1 語のレベル分布

28名の学習者の「対話」と「エッセイ」を形態素解析した結果、日本語能力のレベルが付与された語は約40%程度であった。それらの語を6段階のレベルに分け、学習者群とタスクの違いごとに集計した結果、表3のようになった。

表3 各習熟度・タスクにおける使用語の割合

使用語	上級群		中級前半群	
	対話	エッセイ	対話	エッセイ
初級前半語	12%	12%	12%	12%
初級後半語	12%	12%	13%	13%
中級前半語	8%	8%	7%	8%
中級後半語	3%	7%	2%	6%
上級前半語	1%	1%	0%	1%
上級後半語	0%	0%	0%	0%

表3を見ると、「上級群：対話」「上級群：エッセイ」「中級前半群：対話」「中級前半群：エッセイ」のどれにおいても、初級段階の語は使用割合が変わらないことがわかる。上級群は「対話」から「エッセイ」で、中級後半語が4ポイント上昇しており、中級前半群では「対話」から「エッセイ」で、中級前半語が1ポイント、中級後半語が4ポイント、上級前半語が1ポイント上昇している。

この結果から、上級群と中級前半群にとって、初級語は必要な分だけ自由に使いこなすことができ、作業時間の有無や辞書使用の有無に左右されないことがわかる。一方、辞書使用が必要なレベルの語は「エッセイ」タスクで割合が上がることをわかる。

表3をもう少し詳しく分析するために、28名の調査協力者それぞれについて、「対話」と「エッセイ」で初級前半語～上級後半語の6段階の語の割合がどのように変化したか、個別に見ていくことにする。表4と表5は、各調査協力者の「エッセイ」タスクでの各語の使用割合から、「対話」タスクでの各語の使用割合を差し引いたものである。プラスの数値が出ている語は、「エッセイ」で使用割合が増えていることになる。プラスの数値が出ているセルで3%以上のものに網掛けを行い、高い数値ほど濃い網掛けを行った。

表4と5を見比べると、どちらの表も中級前半語～中級後半語に網掛けのセルが集中していることがわかる。また、上級群は中級後半語に網掛けが多く、中級前半群は中級前半語から中級後半語のどちらにも網掛けがみられる。また、中級前半群のほうが、中級後半語に10～8%の濃い網掛けセルが多く見られることがわかる。

つまり、上級・中級前半のどちらの群の調査協力者も、「対話」よりも「エッセイ」で、よりレベルの高い語を多く使用できている。しかし、中級前半群の調査協力者のほうが、「エッセイ」で辞書等を使用することにより、本来の自分の日本語習熟度を上回るレベルの語を使用している様子が見える。一方、上級群の調査協力者にとっても、「エッセイ」で増えるのは中級後半語が中心で、上級語はそれほど増えないことが分かった。これは山西(2005)が述べるように、上級レベルの学習者は逐語訳的に知らない語を辞書で調べて作文に使うのではなく、ある候補をもって辞書を調べ、吟味して語を使っているということではないかと予想できる。

表4 上級群の使用語の変化（「エッセイ」から「対話」を差し引く）

調査協力者 使用語	CCH 9	CCH 12	CCH 16	CCH 23	CCH 39	CCH 45	CCH 55	CCM 1	CCM 22	CCM 30	CCM 35	CCM 40	CCM 50	CCM 54
	初級前半語	0%	-5%	2%	-3%	2%	0%	0%	7%	4%	2%	2%	0%	-6%
初級後半語	-5%	-1%	1%	1%	-1%	6%	-1%	1%	3%	2%	1%	-3%	-2%	0%
中級前半語	1%	-1%	4%	-1%	-1%	3%	-3%	-5%	-1%	0%	-2%	1%	2%	2%
中級後半語	3%	2%	3%	5%	7%	1%	4%	0%	3%	3%	1%	5%	8%	5%
上級前半語	1%	2%	1%	1%	0%	-1%	0%	0%	1%	2%	1%	0%	1%	1%
上級後半語	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%

表5 中級前半群の使用語の変化（「エッセイ」から「対話」を差し引く）

調査協力者 使用語	CCH 21	CCH 25	CCH 26	CC H29	CCH 30	CCH 36	CCH 49	CCH 54	CCM 7	CCM 14	CCM 17	CCM 18	CCM 28	CCM 42
	初級前半語	3%	-2%	-4%	7%	2%	-6%	-1%	0%	-1%	-4%	0%	-3%	-7%
初級後半語	-3%	2%	3%	0%	0%	1%	1%	-1%	2%	-3%	-4%	-4%	-1%	3%
中級前半語	-1%	1%	-3%	-2%	1%	1%	3%	1%	4%	5%	4%	1%	4%	-3%
中級後半語	1%	2%	10%	-1%	0%	7%	1%	3%	3%	2%	8%	8%	10%	9%
上級前半語	0%	-2%	1%	-1%	1%	0%	0%	1%	0%	2%	0%	1%	1%	1%
上級後半語	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%

5. 2 対話とエッセイにおける各品詞の差

5.1節から、「対話」と「エッセイ」で差が表れるのは、中級前半語以上のレベルの語であることがわかった。そこで、本節以降では、中級前半語以上のレベルの語に対して、さらに詳細に分析をしていく。

本節では、中級前半語～上級後半語の名詞、動詞、副詞、形容詞、形状詞を取り出し、「対話」と「エッセイ」で出現数の比較を行う⁵⁾。

表6 「エッセイ」と「対話」における名詞の使用差 (中級前半語以上)

	上級群			中級前半群		
	エッセイ	対話	差	エッセイ	対話	差
使用語総数	466	228	238	401	127	274
平均	33.3	16.3	17.0	28.6	9.1	19.6
標準偏差	10.9	8.5	14.7	11.3	4.7	11.0
増え方	2.0倍			3.2倍		

表6は、中級前半語～上級後半語の4段階分の名詞を集計したものである。算出の手順としては、まず、調査協力者1名ずつ各タスクにおける名詞の異なり語数を算出し、それを14名分足し合わせた。それを便宜上「使用語総数」と呼ぶことにする。

上級群14名が「エッセイ」で用いた中級前半～上級後半語の名詞の使用語総数は466語である。それを14で割ったものが「平均」であり、33.3語であった。つまり、1名が約33.3語の名詞の異なり語を使用していることになる。しかし、調査協力者によるばらつきがあるため、標準偏差を算出したところ、標準偏差は10.9であった。また、「対話」においては、14名が用いた名詞の使用語総数は228語、平均は16.3語、標準偏差は8.5であった。つまり、「エッセイ」のほうが多くの異なり語を使っており、各自のばらつきも、「エッセイ」のほうが多いことがわかる。「エッセイ」でどのくらい名詞の異なり語数が増えているかを見るため、「エッセイ」の使用語総数から「対話」の使用語総数を引いたものが「差」で示した数値である。増え方はおよそ2倍である。

同様のことを中級前半群で行うと、「エッセイ」「対話」のどちらにおいても、上級群の調査協力者より使用語総数が低く、調査協力者のSPOTの結果、つまり、日本語習熟度の差が表れていると言える。注目すべき点は、中級前半群では「エッセイ」での名詞の増え方が「対話」の3.2倍と、上級群よりも高い増え方になっている点である。つまり、中級前半群の調査協力者のほうが、辞書等を使用した作文である「エッセイ」において、自分が発話で使用しうる名詞の範囲を

大きく超えて、多様な名詞を使用していることがわかる。

表7 「エッセイ」と「対話」における動詞の使用差 (中級前半語以上)

	上級群			中級前半群		
	エッセイ	対話	差	エッセイ	対話	差
使用語総数	138	65	73	87	21	66
平均	9.9	4.6	5.2	6.2	1.5	4.7
標準偏差	4.3	2.7	3.9	3.4	1.6	3.8
増え方	2.1倍			4.1倍		

表8 「エッセイ」と「対話」における副詞の使用差 (中級前半語以上)

	上級群			中級前半群		
	エッセイ	対話	差	エッセイ	対話	差
使用語総数	53	42	11	32	16	16
平均	3.8	3.0	0.8	2.3	1.1	1.1
標準偏差	1.7	2.8	3.5	1.2	1.1	1.6
増え方	1.3倍			2.0倍		

表9 「エッセイ」と「対話」における形容詞・形状詞の使用差 (中級前半語以上)

	上級群			中級前半群		
	エッセイ	対話	差	エッセイ	対話	差
使用語総数	53	23	30	38	9	29
平均	3.8	1.6	2.1	2.7	0.6	2.1
標準偏差	2.6	1.0	2.4	1.5	0.6	1.8
増え方	2.3倍			4.2倍		

名詞を集計した表6と同様の手法で、動詞、副詞、形容詞・形状詞についての集計した結果を表7～9に示す。形容詞と形状詞は総数が少ないため、合算した。

ここから次のことがわかる。まず、表6の名詞の結果と同様に、各調査協力者の日本語習熟度を反映して、上級群より中級前半群のほうが使用語総数が少ない。また、中級前半群は、「対話」における標準偏差が低く、これは、各自の使用する異なり語数のばらつきが少ないことを示している。つまり、中級前半群が「対話」で使用できる異なり語は極めて限られていると言える。例えば、動詞の異なり語は「対話」で平均1.5語しか使用しておらず、上級レベル群の4.6語の半数以下である。

しかし、中級前半群の異なり語数は、「エッセイ」になるとその様子が変わる。表6の名詞の結果と同様に、動詞は「エッセイ」で「対話」の4.1倍、副詞は2.0倍、形容詞・形状詞は4.2倍の使用があり、上級群の増え方より多い。上級群はどの品詞においても、2

倍程度の増え方である。ここからも、作文の執筆時における辞書等の使用が与える影響が、中級前半群に大きくあらわれ、名詞、動詞、副詞、形容詞、形状詞のどの品詞にも現れることがわかる。

5. 3 「エッセイ」における使用語のレベル比較

本節では、「エッセイ」において、上級群と中級前半群の調査協力者が、具体的にどのような語を多く用いたかを比較する。使用語総数が少ないことから副詞と形容詞・形状詞は除き、名詞と動詞の2つの品詞について比較を行う。

表10は、「エッセイ」における中級前半語～上級後半語の述べ語と異なり語について、群全体を1つとみなして異なり語数を算出したものである。つまり、各群14名全体の使用語から異なり語を算出した。

表10 群ごとにみた各語の異なり語数（中級前半語以上）

		名詞	動詞
上級群	異なり語	278	93
	1名しか使用しない異なり語	191	73
	1名しか使用しない異なり語の割合	69%	78%
中級前半群	異なり語	221	56
	1名しか使用しない異なり語	141	36
	1名しか使用しない異なり語の割合	64%	64%
上級と中級の異なり語の重なり		111	22

その結果、上級群では名詞の異なり語は278語、動詞の異なり語は93語となった。このうち、多くの語が14名の中で1名しか使用しない語である。上級群で使用された名詞278語のうち、191語は1名しか使用しない名詞であった。全体に占めるその割合は69%である。動詞では93語のうち73語が1名にしか使用されなかった。その割合は78%である。

また、中級前半群の使用する名詞の異なり語221語のうち141語が1名にしか使われていない。また、動詞の異なり語56語のうち36語が1名にしか使われていない。どちらも全体の64%が1名にしか使用されない語である。

ここから、群ごとに見た場合、使用された異なり語の重なりはとても小さいことがわかる。また、上級群と中級前半群が使用する異なり語の重なりは、名詞で111語、動詞で22語であった。特に動詞は重なりが少なく、両群で異なる動詞が用いられていることがわかる。

では、具体的にどのような語が各群で重なって使用され、どのような語に群ごとの違いがあるのだろうか。

表11 「エッセイ」における名詞の多使用語（使用人数）

	上級群の多使用語		中級前半群の多使用語		使用人数	
	上	中	上	中	上	中
1	栄養	10	9	家庭	10	10
2	家庭	10	10	栄養	9	10
3	ため	8	7	健康	9	8
4	健康	8	9	ほう	11	7
5	それぞれ	7	—	ため	7	8
6	外食	7	4	長所	7	3
7	現代	7	3	日常	7	2
8	人気	7	2	バランス	6	6
9	バランス	6	6	飲食	6	3
10	もの	6	4	材料	6	4
11	メリット	5	3	選択	6	1
12	種類	5	1	短所	5	2
13	デメリット	4	2	発展	5	3
14	ほう	7	11	みんな	4	4
15	みんな	4	4	もの	4	6
16	材料	4	6	安全	4	2
17	時代	4	1	外食	4	7
18	手作り	4	2	経済	4	3
19	人々	4	3	原因	4	1
20	調理	4	—	脂肪	4	2
21	特徴	4	1	大量	4	1

表11は、「エッセイ」における名詞（中級前半語～上級後半語）で多くの調査協力者に用いられている語をリストにしたものである。名詞は、各自の使用回数の平均が大きいため、4名以上の調査協力者が使用したものを表11に挙げた。比較のため、各語において上級群の使用人数と中級前半群の使用人数を併記した。

どちらの群でも多くの調査協力者が使用している語は「栄養」「家庭」「健康」「外食」「バランス」「材料」であり、「エッセイ」の課題内容に強く影響を受ける語である。また、「もの」のような抽象名詞や、「ほう」「ため」のような形式名詞もどちらのレベル群でも使用されやすい。一方、どちらかのレベルでよく使用される語も見受けられる。上級群で4名以上が使用しているが、中級前半群で4名以下しか使用していないものに網掛けを行った。また、同様に、中級前半群で4名以上が使用しているが、上級群で4名以下しか使用していないものにも網掛けを行った。ここから、各群の使用語の傾向を把握することができると考えられる。以下、そのような用例を詳しく見ていく。

上級群で多数に使用される「それぞれ」は、(2)(3)のように、「ファーストフード」と「手料理／家庭料理」という対立する2項を指して使われることが多い。一方、中級前半群では、ほぼ同じ内容を表す場合も、「それぞれ」を用いないことが多い。例えば(4)「両方も」や(5)「そのふたつは」のように表している。辞書を用いることができても、より洗練された(2)(3)のような表現を中級前半群で使用することが

難しい様子がわかる。

- (2) 要するに、手料理とファーストフードはそれぞれ優劣があるとしても、私はできるだけファーストフードを食べないようにするほうがいいと思います。(上級：CCM54)
- (3) 家庭料理の味が失われつつある時代にいる以上、それぞれのメリットやデメリットを見てよう。(上級：CCM50)
- (4) 両方も長所と短所があります。(中級前半：CCM28)
- (5) 日常生活には、ファーストフードと家庭の料理がありますが、そのふたつは短所と長所があります。(中級前半：CCH21)

また、(2) (3) で示したように、上級群で「メリット」「デメリット」が好んで使用され、中級前半群では「長所」「短所」が好まれる点も興味深い。

中級前半群で「飲食」が多く使われているのは、「エッセイ」課題の中国語訳版に影響を受けていると考えられる。I-JASのデータ収集時、課題は学習者の母語で与えられており、「エッセイ」の課題文は(6)のようであった(下線部筆者)。中級前半群の学習者はこれに影響を受けることが多いと考えられる。

(6) 「エッセイ」の課題文

【日本語】日本の新聞社が「私たちの食生活」というタイトルで、エッセイを募集しています。最優秀作品には、賞金3万円が与えられます。

【中国語】日本報社在征稿，题目是《我们的饮食生活》，一等奖的作品，将得到3万日元的奖金。

次に、「エッセイ」における動詞の使用を具体的にみる。動詞は特に上級群で1名しか使用しない語の割合が高い。表12は、3名以上が使用した動詞と2名が使用した動詞を示したものである。3名以上が使用

した語には()で使用人数を付し、上級群と中級前半群で重なる語に下線を引いた。

下線が引かれた語は文型を構成する1語や、コロケーションを成す語が多い。「かかる」は「時間がかかる」、「対する」は「に対して」、「よる」は「によって」、「しれる」は「かもしれない」、「つれる」は「について」の一部である。これらの語はどちらの群でも多くの学習者に使用される。

表12の中で下線が付されていない語について、いくつか具体的に使用例を見る。

まず、中級前半群の「太る」「偏る」「崩れる」「味わう」「与える」の用例を(7)～(11)に示す。下線を引いた個所からもわかるように、これら語は、表11で示した名詞の多使用語と一緒に使用されている。中級前半語～上級後半語が名詞と動詞で結びついている。

- (7) それでたくさん若者は太っている原因でしょう。(中級前半：CCH49)
- (8) 栄養が偏らないよう、メニューには気をつけているから大丈夫、という人もいるでしょう。(中級前半：CCM42)
- (9) 家族の団欒が少なくなって、栄養のバランスが崩れてしまうかもしれないし、病気になる子供もいます。(中級前半：CCM17)
- (10) 私たちの日常生活の中で、よくレストランでファーストフードを買って食べたり、部屋で手作り料理をゆっくり味わったりする。(中級前半：CCM42)
- (11) 家族と一緒に作るの料理が本当に安全で、体にとっても健康的な影響を与えることができます。(中級前半：CCH25)

次に、上級群で3～2名に使用された「思い出す」「避ける」「感ずる」「限る」「失う」の例を(12)～(16)に挙げる。

表12 「エッセイ」における動詞の多使用語 (使用人数)

語の使用者	上級群	中級前半群
3名以上	かかる (12), 対する (6), よる (5), しれる (4), すぎる (4), つれる (4), 思い出す (3), 避ける (3) / (9%)	かかる (7), よる (4), しれる (3), つれる (3), 対する (3), 比べる (3) / (10%)
2名	かける, こめる, つける, 過ぎる, 感ずる, 見つける, 限る, 向く, 失う, 比べる, 要する, 炒める / (13%)	しまう, 空く, 繰り返す, 減る, 仕入れる, 取れる, 増える, 太る, 偏る, 崩れる, 味わう, 目立つ, 与える, 頼る / (25%)
1名	73語 / (78%)	36語 (64%)

- (12) 外食といえば、すぐ思い出すのはマクドナルドとか、ラーメンとか、ほんの短い間に出来るがるファーストフードなどである。(上級：CCH16)
- (13) 油や塩などの量も控えてきますから、余分な栄養を摂取するのも避けられます。(上級：CCM54)
- (14) そして、明るい雰囲気に包まれて、一家団圓に楽しく食事をしたり、一日の発生したことについて話したり、家庭の温かさを感じます。(上級：CCH23)
- (15) 多様さはともかく、外食なので、店の人がどういう供給源から材料を手に入れたのか、そしてどういうふうに調理したのか、お客さんが知っていることは限られている。(上級：CCM30)
- (16) 速さと便利さを引き換えに、生活さと多様さを失っていく。(上級：CCM30)

(12)～(16)の例も中級前半群の例と同様に、名詞の多使用語と結びつくことが多い。それでも、表10で見たように、上級群と中級前半群のどちらもが使用する動詞は22語しか重なっておらず、使用する動詞に違いがみられる。

この結果を解釈してみると、次のように考えられる。辞書等の使用が認められた「書く」タスクにおいて名詞は、調査協力者の習熟度が異なっても、課題の内容に影響を受けて共通した語が用いられる場合が多い。つまり、辞書等の使用によって、中級前半群の学習者が自分自身の日本語習熟度では本来使えない名詞を「書く」タスクで使用していると考えられる。一方、動詞については、中級前半群の中級前半語の使用語数は辞書等の使用によって「話す」タスクより「書く」タスクで格段に増えるが、上級レベルが使用する動詞とは重ならないことが多い。動詞は1名しか使用しない語が多く、調査協力者ごとの異なりが大きい。これは、動詞は課題の内容に影響を受けにくいからだと考えられ、辞書の使用があっても中級前半群が上級群と同様の使用に結びつかないと考えられる。

6. まとめ

本研究では、「話す」タスクの「対話」と「書く」タスクの「エッセイ」をデータとして分析を行った。本研究で設定した2つの研究課題について、結果をまとめる。

「話す」タスクと「書く」タスクで、産出語彙の語彙レベルがどのように異なるかという点については、「書く」タスクにおいて、中級前半語以上のレベルで

使用割合が増えることが分かった。

調査協力者の習熟度別に見ると、中級前半群では、中級前半語～中級後半語に関して、上級群よりも増え方が大きく、辞書使用が影響を与えていることがわかった。また、品詞ごとに見た場合、中級前半群は、「話す」タスクでは使用できる異なり語が極めて限られているが、「書く」タスクで3～4倍程度異なり語が増え、その増え方は上級群より大きい。つまり、「書く」タスクにおける辞書使用は、使用語彙のレベルを上げるだけでなく、使用する異なり語数も増やすといえる。

しかし、特に「書く」タスクで使用される動詞は上級群と中級前半群で重ならない語が多く、タスクの内容に影響を受けやすい名詞と違って、個性が強いことがわかった。

本研究では、以下の点が課題として残る。まず、「対話」と「エッセイ」のそれぞれについて、産出された日本語の正誤判定をしていない点である。制限時間がなく辞書使用可能な「エッセイ」と、即自的な産出である「対話」に対して、正誤判定をしたうえで比較することにより、辞書使用がどのような点に影響を与えるかを分析することができると思われる。また、調査対象者を中国語話者に限ったことにより、漢語の使用等に母語の影響が出た可能性がある。今後は、異なる母語の調査協力者も対象に比較する必要がある。また、第二言語習得において、学習者がどのように言語のジャンルの型を習得していくかを明らかにしていくためには、異なるタイプの談話やテキストを比較分析する必要がある。これらはすべて、今後の課題である。

本稿は、科学研究費助成事業における若手研究「テキストの特徴からみた日本語教育のための類義表現研究」(課題番号18K12420)の研究成果の一部である。

注

- 1 <https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/pl.html>
- 2 下限から14名を選出した結果、3名の「エッセイ」に関して、日本語のHPなどからのほぼまるごとの剽窃が疑われ、1名にはテーマからの逸脱が見られた。そのためこの4名を除外し、リストに基づいて追加の4名を選出した。
- 3 <http://jreadability.net/> 使用時(2020年7月～8月)のシステムのバージョンは0.6.1iである。詳細は李(2016)による。

- 4 「汎用的日本語学習辞書開発データベース」は、科学研究費補助金基盤研究 (A)「汎用的日本語学習辞書開発データベース構築とその基盤形成のための研究」(課題番号: 23242026, 研究代表者: 砂川有里子)で作成されたものである。作成されたデータベースは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」や日本語教科書のコーパスの語彙調査を行うことによって選定された1万7千920項目の見出し語からなっている。各見出し語には、経験の長い日本語教師の主観判定に基づく6段階の難易度が付与されており、jReadabilityの語彙レベルはこの難易度が反映されている (<http://jisho.jpn.org/pl.html>)。
- 5 日本語教育で「形容動詞」または「な形容詞」と呼ばれるものは、UniDicでは「形状詞」と呼ばれている。
- 参考文献
- 奥野由紀子, ディアンニ・リスダ (2015) 「「話す」課題と「書く」課題に見られる中間言語変異性—ストーリー描写課題における「食べられてしまっていた」部を対象に—」『国立国語研究所論集』9, pp.121-134
- 小西円 (2017) 「日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違—I-JASの異なるタスクを用いた比較—」『国立国語研究所論集』13, pp.79-106
- 小林典子 (2015) 「SPOT」李在鎬編『日本語教育のためのテストガイドブック』くろしお出版, pp.110-126
- 迫田久美子 (2016) 『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的なつながりに基づいて—I-JAS構築に関する最終報告書』(平成24-27年度科学研究費助成事業 (基盤研究A) 課題番号: 24251010 研究代表者: 迫田久美子)
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6 (3), pp.93-110
- 迫田久美子 (2019) 「話すタスクと書くタスクに見る日本語のバリエーション—日本語学習者コーパスI-JASの分析にもとづいて—」野田尚史, 迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版, pp.151-168
- 鈴木智美 (2012) 「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38, pp.1-21
- 西菜穂子 (2011) 「タスクとテキストタイプがL2作文の言語分析に与える効果」『Scientific approaches to Language』10, pp.85-103
- 村田裕美子 (2019) 「ストーリー描写課題に現れる日本語学習者の「話し言葉」と「書き言葉」の比較分析—習熟度の差はどのように反映されるのか—」『日本語教育』173, pp.16-30
- 山西博之 (2005) 「問題解決方略としての高校生の辞書使用行動—自由英作文課題におけるプロトコル分析—」『外国語教育メディア学会機関紙』40, pp.93-110
- 李在鎬 (2016) 「日本語教育のための文章難易度研究」『早稲田日本語教育学』21, pp.1-16.
- M. A. K. ハリデー, R. ハッサン (著) 覚壽雄 (訳) (1991) 『機能文法のすすめ』大修館書店

「話す」タスクと「書く」タスクにおける産出語彙のレベルの比較分析

—— 習熟度の差を中心に ——

Comparative Analysis of Active Vocabulary Levels in Speaking Tasks and Writing Tasks:

With a Focus on Proficiency-level Differences

小 西 円*

KONISHI Madoka

留学生センター

Abstract

This study, using the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS), analyzes Japanese learner speaking tasks and writing tasks, focusing on active vocabulary level. Learner proficiency levels were separated into lower-intermediate and advanced groups, and active vocabulary levels were compared from the viewpoints of differences in tasks and in proficiency levels. The writing tasks used as data in this study were those that lacked time limits, and for which use of dictionaries and other reference works was authorized, making these tasks closer to ordinary everyday activities. The analysis results show a greater increase in the use of lower-intermediate or higher words for writing tasks than for speaking tasks, with this increase being more prevalent for the lower-intermediate group. It could be seen that with the lower-intermediate group, the number of types that could be used in speaking tasks was limited, but was three or four times higher with writing tasks. It was also understood that dictionary usage resulted in not only an increase in vocabulary quantity but also a rise in vocabulary level. Additionally, a concrete look at the terms in writing tasks showed that nouns are influenced by task content and tend to overlap among both the advanced group and the lower-intermediate group, whereas verbs tend to diverge between the two groups.

Keywords: writing task, speaking task, vocabulary level, proficiency level, I-JAS

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」を用いて、同一の日本語学習者の「話す」タスクと「書く」タスクを対象に、産出語彙のレベルに着目して分析をするものである。日本語学習者の習熟度を中級前半群と上級群に分け、タスクの違いと習熟度の違いの2点から、産出語彙のレベルを比較する。本研究でデータとして使用する「書く」タスクは制限時間がなく辞書等の使用が許可されたタスクであ

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

り、より日常での活動に近い。分析の結果、「書く」タスクでは「話す」タスクより中級前半語以上の語で使用が増え、その増え方は中級前半群のほうが多かった。中級前半群は、「話す」タスクで使用できる異なり語数は限られているが、「書く」タスクでは3～4倍程度増え、辞書の使用によって、使用語彙数の増加だけでなく語彙レベルも上がっていることがわかった。また、「書く」タスクにおける使用語を具体的にみると、名詞はタスクの内容に影響を受け、上級群と中級前半群で使用語の重なりが多いが、動詞は重なりが少ないことがわかった。

キーワード:「書く」タスク, 「話す」タスク, 語彙レベル, 習熟度, I-JAS